

シリーズ「肺がん」③

「安全に、安心して薬物療法を受けて頂くための看護師の役割について」

独立行政法人 国立病院機構 和歌山病院  
がん化学療法看護認定看護師 西川 貴子

がん治療の最近の動向は手術、放射線、化学療法（抗がん剤）の治療に加えて、免疫療法が第4の治療法として期待されています。免疫療法は、免疫チェックポイント阻害薬といわれる薬を使い治療が行われます。ノーベル賞を受賞されたことで広く知られたオプジーボという薬が免疫チェックポイント阻害薬の一つです。2015年から肺がんの薬物療法でも免疫チェックポイント阻害薬が使われています。最近では従来の抗がん剤と併用した治療が行われるようになりました。治療の選択肢が広がる一方、それぞれ副作用が起こる仕組みが異なるため、治療により起こる副作用が複雑化しています。免疫チェックポイント阻害薬による副作用は、その薬の影響で免疫反応が過剰になり、本来はがん細胞などの異物から身を守るはずの免疫システムに異常が起こり、自分自身の身体を誤って攻撃してしまい、全身のあらゆる臓器に炎症性の免疫反応が起こる場合があります。従来の抗がん剤であれば、吐き気や脱毛等の副作用は発現時期が予測できるのですが、免疫チェックポイント阻害薬による副作用は、今のところいつ起こるか予測がつかないのが特徴です。

安全に治療を受けていただくためには、医療者だけでなく患者さんやそのご家族の治療に関する理解と協力が不可欠です。そこで当院は、初めて治療を受ける患者さんには、入院して頂く場合が多いです。治療が複雑になってきている状況で、いつ、どのような副作用で体調変化が起こるか予測することは難しく、特に初めて治療を受ける患者さんは、治療のイメージがつかず不安を感じておられます。治療は長期間にわたるため、予定されている治療が継続できるようサポートしていく必要があります。そのため看護師は、副作用に関連した症状の観察点や、副作用徴候が現れた時の対処法、毎日の健康チェックの方法、生活で気をつけることや生活上の工夫等、患者さんやご家族に説明や提案を行います。また必要に応じて患者さんやご家族に、薬に関する説明を薬剤師に依頼したり、栄養面での工夫や気をつけることは栄養士に、体力を維持するため理学療法士にリハビリの相談をする等行っています。治療が入院から外来に移行した場合も、入院中の状況が外来へ引き継がれ、外来でも安心して治療が継続できるよう、病棟看護師と外来看護師間で情報交換を行い連携しながら支援を継続しています。また医療者の中でも患者さんやご家族と関わることが多い看護師は、入院や外来を問わず、患者さんやご家族の不安や悩みをうかがい、治療の選択に関わる意思決定をしていただく上で必要な情報の提供や、医師と患者さんやご家族との間の調整役としての役割を果たしています。

このように看護師は、薬物療法を受ける患者さんやそのご家族に対して、医師だけでなく様々な専門職種と連携を図り、治療や生活面に関する情報を共有し、支援を行うという役割を果たすことで、安全に安心して治療を受けて頂けるよう努めています。